

消えゆく南部人：ウィリアム・フォークナー『標識塔』における温情主義

森 本 奈 理

I. はじめに

Light in August (1932), *Absalom, Absalom!* (1936) という傑作を世に問うた期間は、作家 William Faulkner の全盛期と言って差し支えないが、この二大傑作に挟まれる形で、*Pylon* (1935) という、従来から Faulkner の作品としてはかなり質が落ちるといふ評価をされてきた小説が存在していることは誠に奇妙である。一読者としては、*Light in August* でもって、完全に「小説」の書き方を発見し、最高傑作 *Absalom, Absalom!* で、この「発見」を芸術的完成の域に到達せしめた天才作家 Faulkner が、この期に及んで、失敗作 *Mosquitoes* (1927) を書いた習作期の愚行をなぜ繰り返さざるを得なかったのか理解に苦しむところだが、研究者としては、二つの巨大な「人種」テキストの「差異」をより詳らかに知ることができる点で、*Pylon* は黙殺しておくことのできないテキストである。すなわち、*Light in August* では、「人種」を定点観測しているために、「差別」の背景になる paternalism が殊の外強固なものとして描かれているのだが、実際には、この時期は paternalism が危機に瀕した時代であり、この点を考慮して、Faulkner は、*Absalom, Absalom!* に「歴史」を付け加えた。しかし、こうすることで、Faulkner は、*Absalom, Absalom!* の執筆に行き詰ってしまい、問題を「人種」的な paternalism から「階級」的なそれへ downsize しようと、*Pylon* を書き始めることになったのであろう。

Ⅱ．折れた「標識塔」：消えゆく「温情主義」

議論を始める前に、paternalism を、liberalism と対比させることによって、いささか図式的になってはしまうが、定義しておきたい。最初に断っておかねばならないが、paternalism, liberalism 両概念ともに、「超歴史的」な構築物ではなく、「歴史」とともに変容することを免れ得ない「実存的」存在なので、反論の余地が全くないまでに完璧な定義をすることはできない¹⁾。ここでの私の定義は、あくまで Faulkner と同時代的な観点から、それらについて述べたものにすぎない。すなわち、「国家」レベルでは、Franklin Delano Roosevelt の登場によって、「アメリカ」的な liberalism の流れが頂点に達した一方で、南部という「地方」にあっては、paternalism という「反アメリカ」的な制度が未だに命脈を保っていた、という対比軸を念頭に置きながら、議論を進めたいということである²⁾。

したがって、liberalism を定義することは、「アメリカ」を定義するのに等しい大事業なのであるが、その中心概念は「個人の自由」にある。liberalism は、極めて「近代」的な「個人主義」をその源流に持ち、「自己信頼」に基づいて、「他者への依存（隷属状態）」を避けようとする心性だと言っている。故に、人間相互の関係は、「情」による結びつきではなく、businesslike な「契約」によるものになっている。南北戦争後の「労働争議」が頻発した時代にあっては、「中産階級」の自由を保護するために、政府は、資本家の行き過ぎた「個人主義」を制限する役目を担っていたのであり、1930年代の New Deal と総称される「(経済) 不況」救済措置も、Washington DC の官僚がはじき出した「科学的データ」に基づいてなされたのである。すなわち、私人ではなく、公的機関が safety net として機能することで、アメリカ人の「自己信頼」を逆撫でせずに必要な援助を行う、というのがこの時代の liberalism の本懐であった。

こうした safety net（典型的には「保険」制度）は、liberalism のキーワードである。近代的な都市国家にあっては、その構成員の「家族」形態も、近代に特有のものとなる。近代的な「家族」とは、「父」「母」「子」という三者を構成員とする「核家族」のことであり、やはり、この家族制度の最大の利点は、各個人の「自由」を最大化できる「効率性」にあると言える³⁾。その一方で、「核家族」は、「他者」を徹底的に排除した、自律的存在物である以上、そこに「不慮の出来事」がふりかかった場合には、いともたやすく機能不全に陥ってしまうことになる。そうした「不慮の事故」の最たるものが、「パンの稼ぎ手」が志半ばで死亡してしまう事例であるが、こうした場合に、「核家族」制度を崩壊から救うのが、「保険」なのである。

そして、自分の死後に備えて、残された妻子のために「保険」をかけるという行為は、極めて「個人主義」的で、かつ「ナルシスティック」な身振りである。そこには、他人の「情 (sympathy)」に依存しない、という断固たる決意が潜んでいるからである。また、自分の死後に備えて「保険」をかける主体は、他者の影響力を徹底的に排除する点で、「独我論的な自我」でありながら、「死」という自己の未来に関しては、客観的に分析する視点も持ち合わせている。ある意味で、こうした精神構造は「二重意識 (double consciousness)」的と言ってもいいのであるが、この「分裂症」こそ、近代人に特有の精神病理なのである (Szalay 206, 212)。

以上が、この論考で問題にしたい liberalism の側面である。この liberalism が、都市を基盤にする資本主義システムと不可分の関係にあるのに対し、paternalism は、前近代的な農村社会のロジックである。もちろん、大農園主と黒人奴隷の主従関係に基礎を置く、純然たる paternalism は、南北戦争の敗戦とともに潰えてしまったわけだが、それでも、両者の関係は、依然「現物」のやり取りを基本とする、前近代的な雇用関係であった。すなわち、大農園主は、かつての奴隷に、以前と変わらない「無私の忠誠」

を要求する一方で、社会的上位にある者の「義務」として、彼らに様々な便宜を図る、というのが、敗戦後の paternalism の本質であった。そうした便宜には、健康管理（医療費の肩代わり）、法律相談（被雇用者が投獄された際の身元引受人）、身体的暴力からの保護、といったものが含まれたが、なかでも、最後の項目は、再建期終了以降、白人暴徒の暴力に対抗する手段を持たなかった解放黒人にとって、必要不可欠なものであった。⁴⁾

そして、paternalism の最大の特徴と言っているものは、雇用「契約」が文書ではなく、口頭で交わされたことである。雇用者である大農園主からすると、paternalism という語が示す通り、雇用関係は、父と子の間に見られる「情」に基づいたそれであればあるほど望ましかったのであり、文書での契約は、あまりにも人間味を欠いた、businesslike なやり方に見えたのだ。このように、「血縁」を超えた人間関係にまで「情」を持ち込む paternalism は、いかに相手が下層に属する者といえども、「個人の自由」をないがしろにする点で、徹底して「反アメリカ」的な「封建制度」であった。

ここで断っておかねばならないことは、この論考での paternalism の定義は、マルクス主義的なそれとは一線を画しているということである。マルクス主義的な paternalism の定義によると、まさしくこのシステムこそが、上位者による「搾取」を正当化するものであり、南部の paternalism が New Deal という liberalism の介入を嫌ったのは、連邦政府による公的な保護が下層民に与えられると、それまで私的に与えてきた保護が無効になり、その分だけ労働者に対して支払わなければならない賃金が上昇する、そういった事態は、機械化以前の「労働集約型」経済にどっぷりと浸かっていた南部支配者階級にとって、まさに死活問題であった、ということになる。⁵⁾確かにそれはその通りなのであるが、このような「うがった」読みをしてしまえば、前近代的な paternalism と、むしろより資本主義（マルクス主義の主たるターゲットである）のロジックに近い liberalism との線

引きができなくなってしまう。マルクス主義の図式を使えば、人間の全ての活動は「搾取」に行きつくことになり、それはそれで正しいのだが、全てを「階級闘争」に還元してしまう態度は、人間活動の裏に潜む「気概」といったものを完全に無視してしまっている。もしそのような分析しか許されないのであれば、Charles Chesnutt, *The Marrow of Tradition* (1901) で、paternalist の Mr. Delamere が忠実な召使い Sandy Campbell を死刑から救い出す際に見せる「気概」を全く理解できなくなってしまうであろう⁶⁾。したがって、この論考では、こうした「気概」に注目して、paternalism を「上位者の良心」、liberalism を「全き個人主義の発露」とだけ定義するにとどめたい。

そうは言っても、マルクス主義的なアメリカ南部 paternalism 評価の一番の旨味はきちんと味わっておくべきである。その旨味とは paternalism を「歴史化」するプロセスであり、それによると、南部 paternalism が最大の危機に瀕したのが、まさに (Faulkner が *Pylon* を執筆していた) New Deal による「大きな政府」の時代であったということだ。先程述べたように、その危機とは、連邦政府による社会福祉政策が農場労働者までもターゲットにすると、それまで私的に与えてきた「温情」が意味をなさなくなり、その分だけ労働者の賃金を高く設定せねばならず、大量の労働力を必要とする大農園主としては、こうした干渉は是が非でも排除せねばならなかったのである。実際には、南部出身の民主党代議士が Roosevelt と取引をすることで、干渉は骨抜きにされ、paternalism は相も変わらず存続することになるのだが、*Brown v. Board of Education* (1954) 判決と前後して、南部にも農場作業の「機械化」の波が押し寄せると、むしろ paternalism が「高コスト」経営術になり下がり、ついにはその姿を消してしまうのである。すなわち、*Pylon* と並んで Faulkner が数々の傑作を書いていた時代こそ、paternalism と liberalism の最大の激戦地であったのであり、この時代背景は、とりわけ *Pylon* に色濃く反映されている、というのが、

この論考における私の主張なのである。

それでは、paternalism が小説 *Pylon* のなかにどのように描かれているのか、見ていくことにしよう。主要登場人物である、匿名の reporter と飛行士 Roger Shumann はともに paternalist であるが、paternalism が patron と client の「持ちつ持たれつ」の関係であるように、彼らも当然 paternalist の連鎖の網の目に絡め取られている。すなわち、編集長 Hagood は reporter に対して、reporter は Roger に対して、Roger はお抱えの一座の連中（妻 Laverne、息子 Jack、パラシュート降下「野郎」の Jack Holmes、機械工の Jiggs）に対して、paternalist として振る舞うのである。

まず、連鎖の「上流」から分析していきたい。新聞社の編集長 Hagood と reporter の関係は、businesslike なそれではなく、あたかも「保護者」「被保護者」のそれである。母が何度も再婚しており、本当の父親の存在を知らずに育った reporter に対して、Hagood は同情を禁じ得ず、あたかも代理の父であるかのように、「無利子」で金を融資し続けている。編集長の好意に甘えるあまり、reporter は何度も気安く金の無心をするが、無心がいかに容易いものであったかは、作品の結びで示されている：

[...] now I am going down to Amboise st. and get drunk a while and if you dont know where Amboise st. is ask your son to tell you and if you dont know what drunk is come down there and look at me and when you come bring some jack because I am on a credit. (992)

上の引用は、reporter が編集長に宛てた「メモ書き」の一部であるが、「酒場のありかが分からなければ、あんたの息子に聞いてくれ」という文句は、reporter が自分を編集長の息子と同一視していることを示している。

それ以上に興味深いのは、先の引用が被保護者から保護者に宛てた書簡体になっていることであり、*Pylon* よりも少し前に書かれた *Daddy-Long-Legs* (1912) を彷彿とさせることである。Jean Webster のベストセラー小説では、被後見人の Judy が、見知らぬ後見人 Mr. John Smith に、「学資」

の援助のお礼として、定期的に「手紙」を書くことになっているが、この手紙こそが金を無心する機能を担っている“*These monthly letters are absolutely obligatory on your part; they are the only payment that Mr. Smith requires, so you must be as punctilious in sending them as though it were a bill that you were paying*” (7)。

また、編集長は、事件に文学的脚色を施して報道しようとする reporter を諫め、事実を「ありのままに」報道することこそ「現代」のジャーナリズムであり、会社の儲けにつながるのだ、と主張しつつも、彼自身もこのビジネスの論理に完全に汚染されているわけではないことを秘かに示している：

“Listen,” the editor said; he spoke patiently, almost kindly: “The people who own this paper or who direct its policies or anyway who pay the salaries, fortunately or unfortunately I shant attempt to say, have no Lewises or Hemingways or even Tchekovs on the staff: one very good reason doubtless being that *they do not want them, since what they want is not fiction, not even Nobel Prize fiction, but news.*” (808 emphasis added⁸⁾)

編集長は、経営陣がジャーナリズムに「文学」を望んでいないことを指摘しているが、経営陣を「我々 (we)」ではなく「彼ら (they)」と名指すことで、自身がそこから一線を画していることをさりげなく示しているのである。さらに、この引用では、Faulkner の文学上の最大のライバル Ernest Hemingway だけでなく、Sinclair Lewis にまで言及されていることが面白い。もちろん、アメリカ作家初のノーベル文学賞受賞者として、編集長は Lewis の名を挙げているのであるが、彼の代表作 *Main Street* (1920) がある意味で paternalism を明快に分析した作品であることを考慮すると、この言及ほど、この文脈で適切なことはないのである。

それでは、paternalism の連鎖の「中心」とでもいうべき、reporter と Roger

Shumann の関係を分析していこう。もちろん、reporter は、Roger に対してだけ paternalistic に振る舞うのではなく、彼の一座のもの全員に（ひいては一介の乞食にまで）親切にしてやるのだが、それでも、この二人の関係が一番濃密である。一読して分かるのは、reporter と Roger の関係が、「取材するもの」「取材されるもの」といった「客観性」に基づいた関係ではなく、前者は後者に対して強く感情移入をしていることである。したがって、reporter の興味は、腕利きの飛行士として上空を舞う Roger のみならず、地上にて現実の苦労にまみれた Roger にまで及んでいる。一座の連中を養う「生活費」の工面に苦勞する Roger に対して、reporter は、編集長から無心した金を実に気前よく「与える」のである。編集長と reporter の関係と同じく、Roger も reporter から金を「借りて」いるようであるが、彼にどこまで返済の意思があるのかは、その金を引き出す容易さを見る限り、非常に疑わしい。（Roger の死後に Jack Holmes が借金の返済をするが、返済があたかも Roger の意思であったかのような口ぶりでありながら、そこには liberalist として知人からの援助を嫌う Holmes の心性がはっきりと読み取れる。）

飛行機競争の賞金が週末まで支払われないことから、Roger たち一行は、ホテルに滞在できず、reporter の家に厄介になるが、自分自身の寝場所を失った reporter は酔っ払って外で一夜を過ごす。朝起きた Roger たちは、reporter のことを気にかけているが、それはおそらく金を無心するためであり、実際に戸口で酔っ払って倒れ伏している reporter のポケットから金を取り出す“Then the woman [Laverne] stooped and while Jiggs turned the reporter's inert body from thigh to thigh she took from his pockets a few crumpled bills and a handfull of silver” (857-58)。もちろん、全ての金を取ってしまうのではなく、必要最小限だけを失敬するのであるが、こうした一連のやり口が気に入らない Holmes は、その金を奪い、その場で投げ捨て、一人でさっさと飛行場に出かける。しかし、残った一行

はそれを拾い集めて、その日の必要経費に充てるのである。

ここで注意すべきは、Roger たちのやり口は、この直後に reporter のもとに現れる黒人掃除婦 Leonora のそれと酷似していることだ。彼女はこの小説に登場する唯一の黒人であり、ほぼ完全に minstrelsy の味付けが施されたステレオタイプな黒人である。すなわち、民族全体の社会的地位向上を慮り、刻苦努力を怠らない気高さを持つ「新しい黒人」ではなく、奴隷制度下の白人・黒人の関係を彷彿とさせる、主人の白人を丸めこむ器用に長けた黒人なのである。Leonora は、「雇い主」reporter が彼の家の戸口で倒れ伏していることに気づくと、ほぼ無意識のうちに彼の金を失敬する：

[...] her hand reached in and drew out the two folded bills where Jiggs had put them with a single motion limber and boneless and softly rapacious as that of an octopus, then the hand made a second limber swift motion, inside her coat now, and emerged empty. *It was her racial and sex's nature to have taken but one of the bills [...] depending upon her own need or desire of the moment [...]*

(865 emphasis added)

奴隷制時代の黒人奴隷においては、白人主人の所有物と自分のその区別が曖昧なものも多数おり、そうした人物は必要に応じて主人のものを失敬したのであるが、Leonora の習性にもこのような paternalism の黄金期の遺物がはっきりと残っており、彼女は、受け持ちの家を掃除するついでに、わずかの酒を持参のビンに移し替え、その日の終わりにグラス一杯の「カクテル」を味わうことにしているのである。

Roger に対する reporter の paternalistic な振る舞いが極点に達するのは、「約束手形」を偽造してまで、彼のためにレース出場用の飛行機を用立ててやるくだりである。reporter は「手形」の保証人になるのだが、Roger はもう一人の保証人として、彼の父の名前をそこに書き込む：

[...] the blank signature line beneath the one where he [the reporter] had signed, watching the letters emerge: *Roger Shumann* But he did not move even yet; it was not until the pen without stopping dropped down to the third line and was writing again that he leaned and stopped it with his hand, looking at the half finished third name: *Dr Carl S* (920)

事ここに至って、Roger の「想像上の父」として振る舞ってきた reporter は、Roger の「現実の父」と重なり合う。Roger も彼の父 Dr. Shumann も Ohio の北部人でありながら、Dr. Shumann はれっきとした paternalist である。彼は、Roger に医業を継いでもらいたいと思いつつも、息子に「機械工」としての才能があることを知ると、先祖伝来の土地を売ってまで「飛行機」を買ってやるが、職業人としても、貧しい患者を分け隔てせずに診療してやり、患者が診療費を現金で支払えないときには、「ハム」「ベッドカバー」といった「現物」での支払いを受けてやったのである：

A little country town where it's mostly Swede farmers and the [Roger's] old man gets up at any hour of the night and rides twenty or thirty miles in a sleigh and borrows the babies and cuts off arms and legs and a lot of them even pay him; *sometimes it aint but a couple or three years before they will bring him in a ham or a bedspread or something on the installment.* (964 emphasis added)⁹⁾

ここで注目すべきは、Dr. Shumann と彼の client が「現物」での取引をしていることである。奴隷制度崩壊後の南部では、大農園経営は sharecropping と呼ばれる「現物支給」「現物納」の借地契約が横行したが、これは patron, client とともに「現金」の持ち合わせがなかったことに由来するものである。この sharecroppingこそが paternalism と分離不可分の制度であり、知ってか知らずか、Dr. Shumann もこのやり方に倣っているの

ある。

ただし、reporter は Roger だけにではなく、Roger お抱えの一座のものにも親切にしてやる。恋人 Laverne に対する「欲望」を嗅ぎつけて、Holmes はそうした親切を受けようとしなが、reporter は、Laverne には餞別の金を、Jack にはアイスクリームを、Jiggs には酒と保釈金を与えている。とりわけ、「保釈金」、client に対して法律面でのサポートをすることは、paternalist の支出の重要項目なので、少し詳しく論じておきたい。もちろん、Pylon においては、おごってやった酒のせいで、喧嘩を起こし投獄されている Jiggs を保釈させてやっている点で、かなり戯画化された paternalism になっているのであるが。

こうした paternalist の client に対する法的保護を、重要プロットのの一つに仕立て上げている文学作品が、Charles Chesnutt の *The Marrow of Tradition* である。Chesnutt 自身は、Ohio で弁護士業のかたわら、当時の文学作品が「南部」のありのままを描いていないことを嘆いて、この世界に打って出たアフリカ系アメリカ人（黒人）であるが、彼の中に黒人の血はわずかししか流れていなかっただけでなく、一族は奴隷解放以前から自由黒人であったこともあり、こうした自由黒人と解放黒人が同列に扱われてしまう南北戦争後の社会に反感を抱いていた。Chesnutt にとって、理想の社会は、白人貴族が paternalist として君臨した、奴隷解放以前の「旧南部」であり、戦争後「北部 liberalism」がこの地に移植されてしまったことにより、それまでの牧歌的な人種関係が崩れてしまった、と考えていたふしがある。

したがって、彼の小説 *The Marrow of Tradition* でも、（消えゆく）paternalist の Mr. Delamere と彼の召使い Sandy Campbell に、最も高潔な人格が付与されている。忠実な召使い Sandy は、白人女性 Mrs. Ochiltree を殺害したかどで、誤認逮捕され投獄される。（実際の犯人は、Mr. Delamere の溺愛する孫 Tom であり、賭け事で作った借金の返済をするために女性

を殺し、Sandy にその「濡れ衣」を着せたのだった。) 黒人男性が白人女性を殺したとあっては、当然、Sandy にも「リンチ」の危険性があるのだが、この「白人暴徒による暴力」を防ぐために Mr. Delamere は動き出す。監獄に訪れた Mr. Delamere は、誰から Mrs. Ochiltree の財布をもらったのかを Sandy に問いたですが、Tom のしわざだと言って、敬愛する主人を悲しませたくないばかりに、頑として口を割ろうとしない：

Old Mr. Delamere's faculties, which had been waning somewhat in sympathy with his health, were stirred to unusual acuteness by his servant's danger. He was watching Sandy with all the awakened instincts of the trial lawyer. He could see clearly enough that, in beginning to account for the possession of the gold, Sandy had started off with his explanation in all sincerity. At the mention of the silk purse, however, his face had blanched to an ashen gray, and the words had frozen upon his lips. (623-24)

Mr. Delamere は、Sandy の「沈黙」を、罪意識からの言い淀みではないと確信しているが、彼の確信を支えているのは、Sandy のそれまでの忠誠と、「Delamere のような名家の空気を吸ってきた人間は、たとえ黒人であろうとも、家名に泥を塗るような恥ずべき行為を絶対にしない」というプライドである。この「家名に対する誇り (the honor of a family)」こそが、paternalist の「気概」なのである。

ただし、この「気概」には、劣位にある人間を「(所有) 物」と見なしではばからない「傲慢さ」が同居していることを見逃してはならない。監獄を出た後、Mr. Delamere は、リンチの教唆を止めさせようと「新聞社」を訪ね、「家門」を根拠に Sandy の無実を証明しようとするが、人種差別主義者にせせら笑われる。新しい南部人である彼は、Mr. Delamere に、すでに黒人は白人の所有物ではなく、統御不可能な存在なので、白人は黒人が罪を犯すことを防げないし、また彼らが罪を犯したところで、保護し

てやる責務もないのだ、と言いつつ。

Mr. Delamere ほどの強さはないまでも、Roger たちにとって、reporter はれっきとした patron であり、「あしながおじさん」である。“They [the reporter and Jack] went on, though Jiggs saw them twice more, the second time the shadow of the man's and the little boy's heads falling for an incredible distance eastward along the apron”とあるように、Jack を肩車している reporter は、Mr. John Smith よろしく「長身の影」を投げかけるし、Jiggs を保釈してやった彼は、Roger の視点から、“patron (even if no guardian) saint of all waifs, all the homeless the desperate and the starved”と記述される (794, 900)。こうした「温情」の主たる源泉は、reporter の「同情心」だと説明されるが、そこには、Roger たちとの「階級の相違」からくる「上位者としての責任感」があることも否定できない。reporter 自身による以下の記述にこのことが見てとれる：

Because they aint human like us ; they couldn't turn those pylons like they do if they had human blood and senses and they wouldn't want to or dare to if they just had human brains. Burn them like this one tonight and they dont even holler in the fire ; crash one and it aint even blood when you haul him out : it's cylinder oil the same as in the crankcase. (804 emphasis added)

「やつらに考えるだけの頭があれば、飛行機競争なんかではなく、新聞記者にでもなって生計を立てているだろう」と reporter の同僚も言うように、*「飛行機乗り (they)」と「記者たち (us)」の間には、やはり厳然とした差異があり、上位にある「我々」からすれば、「やつら」は人間でなく、その内部にはシリンダーオイルが充満する「もの」にすぎないのだ。(その意味で、英語の代名詞 they が「人」「もの」両方を指すことができるのは本当に興味深い。)*

それでは、paternalism の連鎖の末端、Roger と彼の扶養「家族」の関

系の分析に移ろうと思う。この集団において、Roger が paternalist である根拠は、何にもまして、彼の「家族」が「血縁」に基づかないところにある。何の縁もない Holmes, Jiggs を養っているだけでなく、法律上の実子 Jack Shumann にしても、Roger 自身の血を引いているのか、Holmes の血を引いているのか全く定かではない。それにもかかわらず、Roger は「家族」を養う賞金稼ぎに、飛行機競争に出続けるのであり、持ちこんだ自機を破損してしまっても、信頼性の疑わしい飛行機を手に入れてレースに参加しようとするのである。「約束手形」の偽造によって手に入れたこの飛行機は、政府役人から飛行許可を取ることができないのだが、レースの主催者 Feinman は、以下のような弁論で、無理矢理に飛行許可を与えてしまう：

We have had our crops regimented and our fisheries regimented and even our money in the bank regimented. All right. [...] But do you mean to tell me that Washington can come in and regiment a man that's trying to make his living out of the air? Is there a crop reduction in the air? (928)

ここで、Feinman は New Deal の「干渉政策」をあざ笑っているのだが、彼の言い分をそのまま Roger の動機だと解釈してはいけない。ユダヤ人 Feinman は、New Deal のような「最先端の liberalism」を批判しているからといって、ただちに paternalist に分類できるわけではなく、あくまで、Ayn Rand, Milton Friedman といった同族のように、「右寄りの liberalism」から「左寄りの liberalism」を攻撃しているに過ぎないのである。だから、Feinman が Roger の試みを擁護しているからといって、Roger までもが、「空」という「最後のフロンティア」に屹立する「個人」たらんと、飛行機を駆っているわけではない、ということだ。

私が何にも増して強調したいのは、Roger が徹頭徹尾 paternalist である、ということだ。その最大の根拠は、Roger が飛行士たちの「互助会」、一

種の「保険」をきっぱりと拒否する身振りにある。Roger も参加している飛行競技会で、Frank Burnham という飛行士が墜落死し、競技会のプログラムを新たに刷り直さなければならなくなる。初版のものでは、この後の演目に Burnham の名前が記載されたままで、それでは出来もしないことを宣伝していて気持ちが悪い、と主張する競技参加者もいるからである。もちろん、プログラムを刷り直すには金がかかるので、競技会から支払いを受けるものはみな一律の金額を拠出し、それを印刷代に充てるという「互助会」である“‘It’s like this. Somebody has got to pay to have new programs printed. These g—thisthey saw w—the contestants and announcers and everybody drawing jack from the meet, should do it’” (879)。この案によると、全ての関係者は、給料・賞金から2.5%の天引きがされる、ということである。Roger はこの「死亡保険」に一顧だにしないが、彼の拒否反応が liberalism の「個人主義」からくるものではないことを読者は認識しておかなければならない。この時代の「個人主義者」は、自分の死後残された妻子が他人の情けに依存することなく生きていけるように、むしろ「保険」に加入することを好んだのであり、Roger はこうした liberalist のやり方を全く踏襲していないのだ。

その意味で、Roger の最期には、Faulkner ならではの慧眼が示されている。Roger は、一切の保険を掛けずに、信頼性の疑わしい飛行機を上空へと向けるが、飛行機は空中分解し、飛行場に隣接する湖に墜落死する。当然、その後、彼の遺体回収作業が始まるが、堤防のコンクリートブロックもろとも湖底へ沈み、その下敷きになってしまったために、遺体は回収できない“‘They say now it must have hit on one of those big blocks of concrete and broke it loose and they both went down together only the ship got there first’” (948)。「保険」の掛けられていない Roger の「死体」は、「現金」に交換できない。このように、Roger が liberalism の交換体系に全く関わっていないことを象徴的に示そうと、Faulkner は「遺体」を湖

の底へと沈めているのである。

それでは、なぜ、Roger が頑なに「保険」を拒否するのかという疑問も湧いてこようが、この疑問に対しても、やはり、彼が paternalist であるからとしか答えられない。Roger は、「約束手形」の保証人として、何年也会っていない父 Dr. Shumann の名前を書き込むように、たとえ自分がここで死んでしまったとしても、父なり reporter なり、他の paternalist が後に残った妻子の面倒を見ることを毛嫌いしていないどころか、そうあってほしいとさえ願っているのかもしれない。いずれにしろ、Roger にとって大切なのは、「家族」を養う当座の金を稼ぐことであって、自分の死後を心配することではないのだ。したがって、なぜ Roger が危険を知りつつも欠陥飛行機でレースに参加したのか、という謎に関しても、同じ解答をしなければならない。Roger の「自殺的な事故死」の動機を、reporter の同僚がそれぞれの解釈を提出しているが、*Pylon* という作品にあっては、真相は「藪の中」ではなくて、物語の最後にきちんと書かれているのである：

“Not Roger’s. Yes. Roger and I were—But no matter. I know, this time. Roger and I both know. So we will need money and that’s what Roger was trying to do in that meet. The ship he won a prize with the first day was too slow, obsolete. But that was all we could get and he outflew them, beat them on the pylons, by turning the pylons closer than the others dared for that little money. Then Saturday he had a chance to fly a ship that was dangerous, but he had a chance to win two thousand dollars in the race. That would have fixed us up. [...]” (987)

Laverne によると、Roger の「自殺的な事故死」の動機は、お腹の中にいる、彼女と Holmes の間にできた子供を養うための金である。この動機は、「飛行機があれば飛ばずにはいられない」という記者の一人が挙げるもの

ほどには英雄的に聞こえないかもしれないが、Roger が「個人主義者」ではなく paternalist であることを考慮すると、はるかに英雄的な響きを持っているのである。paternalist にとって、妻の「連れ子」のために命を投げ出すことほど英雄的な身振りは存在しないのである。そして、reporter は、同じ paternalist として、このことに気づいているからこそ、Roger の死を伝える記事原稿から、Roger に手向ける「花輪 (wreath)」の一語を省くことができないのである。言うまでもなく、この「花輪」は、reporter のみならず Faulkner の、消えゆく paternalism に対する「鎮魂」の儀式なのである。

ところで、Roger の死後、封建的な「家族」は解体し、近代型の「核家族」が誕生することになる。新たに家長となった Holmes は、血が繋がってなさそうな Jack Shumann を Dr. Shumann のもとに置き去りにし、妻 Laverne と、自分の血を引いたお腹の中の赤子の三人で、人生の「巻き直し」をはかる。(Jiggs は、もともと Holmes と折り合いが悪く、一座を離れ、パラシュート降下で生計を立てるつもりでいる。) このことから分かるように、Holmes は liberalist であり、他人の「温情」にすぎることを潔しとしない。Laverne が reporter から失敬した生活費を投げ捨てるだけでなく、Roger が reporter に作った「借り」を全て清算して、Holmes は New Valois を立ち去る。こうしたこと以上に Holmes が liberalist である証拠になるのは、彼が「保険」加入に満更でもなさそうな素振りを見せることである。Holmes が先述した「互助会」に興味を持っていることは、Roger に “What's two and a half percent. of twenty-five bucks?” と尋ねていることから明らかである (880)。(「25ドル」とは、Holmes が一回のパラシュート降下で得る金額である。) Holmes は、飛行機から飛び降りるプロだけに、paternalism という墜落寸前の飛行機から上手く飛び降り、liberalist として歩み去っていくのである。(ちなみに、Laverne も一度 Roger の飛行機からパラシュート降下を成功させている。)

南北戦争以降の南部は、再建時代の「急進的共和主義」、*Brown v. Board of Education* 判決といった目立つものだけでなく、資本主義的経営システムのような隠微な形でも、北部 liberalism の侵食を受けてきたので、Holmes のように paternalism を見捨て、liberalism への脱皮をはかることこそがこうした変化の時代を生き抜く王道なのであるが、基本的には paternalist であった Faulkner は、Holmes のような liberalist に好意を抱いていない。¹⁰⁾ Faulkner によると、Holmes の外見は“He wore a narrow moustache above a mouth more delicate and even feminine than that of the woman whom he and Jiggs called Laverne”と形容される (797)。彼はハンサムだが、それでも女性以上に女性的なところがある。したがって、新形態の「家族」においては、女性の Laverne がむしろ男性的な役割を担い、男性の Holmes がより女性的に「控え目な」役割を果たすのであろうが、このことを最も雄弁に示しているのが、Jack Shumann を引き取ってもらうために、一行が Ohio の Dr. Shumann のもとにやってくるエピソードである。Holmes は、駅に着くと、ここで待っていると言い、Jack を Dr. Shumann に引き渡す「修羅場」を Laverne に丸投げする。Jack は Holmes も一緒に行こうと言い張るが、Holmes は頑なに拒み続ける。要するに、liberalist の Holmes には、paternalist の Roger にあった「責任感」が欠如しているのである。Roger たち一行が夜の街を徘徊するくんだりでも、Holmes が Jack を抱いてやるのは、Roger に養ってもらっているお返しとしてであり、大人が子供に抱く「情」からではない。Jiggs は、このことをきちんと見抜いているので、「お前は子供の抱き方なんか知らないだろう」と、Jack を Holmes から奪い取るのである。

ここまで、paternalism と liberalism を整理しながら *Pylon* を読んできたが、その意図は、Faulkner のような天才作家といえども同時代の社会背景からは無縁ではいられないことを示すだけでなく、Faulkner を「アメリカ帝国主義 (US imperialism)」の観点から論じる近年の文学批評のあ

り方に一石を投じたいからでもある。結論を先取りすると、「帝国主義」のような「膨張政策」は、paternalism よりも liberalism の論理的帰結であり、これまで見てきたように、基本的には paternalism に共感を寄せている Faulkner に、「帝国主義」的表象を読み出そうというのは、いささか勇み足にすぎるように私には思われるのだ。「植民地」という新たな「フロンティア」を必要としているのは、paternalism ではなくて、むしろ liberalism のほうであり、「個人主義」を標榜する liberalism が、他人（他国民）の権利を踏みにじる矛盾を隠蔽するために、時として paternalism を「隠れ蓑」に用いるのだ、と私は見ている。¹¹⁾ liberalism が、「自己実現」の大義名分のもと、「個人」をどんどん肥大化させていくプロセスであるのに対して、paternalism はこうした upward mobility を嫌悪する「現状維持」的なシステムであるのだ。¹²⁾ すなわち、「帝国主義」は、liberalism のような「自己肥大化」の論理であり、paternalism のような非「アメリカ」的要素とは似ても似つかないのだ。したがって、Faulkner の作品における「人種差別」的表象についても、それはあくまで paternalist の意識的なそれから出てきたものであり、これを liberalist の無意識的な「人種差別」と混同してはならないのだ。

Faulkner の作品を「帝国主義」の観点から読み直す（現在進行中の）作業において、*Pylon* もまた例外ではなく、その代表的なものとして、Taylor Hagood による批評を挙げることができる。Hagood の読みは、私の読みのちょうど正反対なので、彼の論に反駁しておくことで、私の論点をより明確なものにできるはずである。Hagood は、競技用飛行機を馬にたとえるが、これは正しい読みである。実際に、作中で何度か、飛行機レースは競馬にたとえられている。物語の舞台 New Valois は、New Orleans を下敷きにした架空の土地で、競馬は New Orleans の「売り」の一つであった。¹³⁾ しかし、「飛行ブーツ」に対する Jiggs の fetishism に注目することで、Hagood は、飛行機レースをカウボーイによる西部牧場経営に読み変

えている。さすがにこれだけでは読みが恣意的にすぎると判断したのであろうが、論を補強するために、Hagood は、*Pylon* 出版当時のアメリカでは「カウボーイ映画」が人気を博していた事実に触れている。しかし、Faulkner は、この小説を書きながら、ハリウッドで映画脚本も書いていたのであるが、そこに現れるテーマは、全て「飛行機」「自殺的な事故死」に関するものばかりであり、この事実は Hagood の論の反証になるかもしれない¹⁴⁾。面白いのは、どうやら Faulkner がこうしたものを(大衆受けする)「英雄」表象だと考えていたらしいことである。

こうした前提から導かれる Hagood の結論は、“[...] the pilots thus emerge in this scene as the cowboys in a new imperial project, riding their own animals into the new frontier of the sky and therefore the new imperial heroes in a new space”ということになる (103)。やはり、彼も「空」を「新たなフロンティア」だと考えているわけだが、一般論で言えば、この連想はおそらく正しいだろう。しかし、Faulkner の *Pylon* において、「空」と相対峙している特権的な飛行士は Roger Shumann である。そして、paternalist である Roger にとって、「空」は新たな「自己実現」の場ではなく、現状(お抱えの一座)を維持する金を得るために「自転車操業」しなければいけない職場なのだ。先に引用した Feinman のセリフは、そのまま読めば「帝国主義」のロジックになるが、発言の主が金儲けをするために「自己実現」しようとするのに対し、Roger は「現状維持」をするために金儲けしようとするのである。こうした両者の違いを見落としてはならないし、見落とさないためには paternalism と liberalism の違いを区別しておかねばならないのだ。

最後に、Faulkner の伝記をひも解いて、彼がアメリカ人として liberalism に包摂されつつも、南部人として paternalism の「気概」を決して捨て去らなかったことを確認して、この論を締めくくりたい。ノーベル賞受賞後の Faulkner は、「冷戦」構造下において、「アメリカ」のスポークスマン

としての役割を公式に担い、世界各地を訪れるが、そのなかでも、彼が我が国「日本」を訪れ、日本人への共感を隠さなかったことは特筆に値する。Faulkner によれば、「アメリカ南部」と「日本」が共通するのは、「貴族」「武士」という支配者階級と「奴隷」「農民」という被支配者階級を持った点だということである (Nagano 86)。このくだりに対して、Harilaos Stecopoulos は“Yet to compare the southern cavalier and the Japanese samurai a year after Brown also was to make a political point about the right of so-called backward peoples to defend themselves against a stronger foe”と論じているが、名高い *Brown v. Board of Education* 判決といえ、まさしく北部 liberalism による南部 paternalism への干渉であり、いわゆる「穏健派」の Faulkner はこうした形の強制介入は快く思っていなかったのである (139)。同じく北部 liberalism に蹂躪された土地であっただけに、Faulkner は、liberalist として振る舞うことを期待されながらも、思わず本音を漏らしてしまったのであろう。

Ⅲ. おわりに

ここまで、*Pylon* における paternalism を liberalism との比較を通して見てきたが、Faulkner は、旧南部のロジック paternalism に惹かれつつも、paternalist の Roger が事故死してしまうように、その限界をはっきりと認識していた。両者のせめぎ合いにおいて、結局敗れ去るのは paternalism のほうなのだ。Faulkner の作品群にあって、*Pylon* はマイナーな位置づけをされており、Yoknapatawpha を舞台にしていない以上これも致し方ないが、この作品が興味深いのは、最高傑作 *Absalom, Absalom!* と同時並行して書かれた、という事実である。*Absalom, Absalom!* の執筆に行き詰った Faulkner は、代わりに *Pylon* を書き始め、これをさっさと書き終え、

再び *Absalom, Absalom!* の執筆に取りかかるのであるが、*Absalom, Absalom!* の執筆過程で彼が拘泥していた問題は、Charles Bon の「血」について、四人の語り手がどれだけの情報を持っていたのか、ということであった。¹⁵⁾要するに、*Absalom, Absalom!* は「人種」問題にどっぷり浸かったテキストであるのだが、この大問題をいったん「塩漬け」にしておいて、「階級」面からのみ paternalism を分析するために、Faulkner は、(Yoknapatawpha ではなく) New Valois を必要としたのではなかったのではないか。

こう考えると、*Pylon* と *Absalom, Absalom!* の間には大きな共通点があることに我々は気づく。ともに、paternalism が消失する瞬間を描いたテキストなのだ。Thomas Sutpen という、Virginia の山岳地方生まれの素寒貧の白人少年は、upward mobility を実現させたという意味では liberalist ではあるが、最後には paternalist として、黒人青年 Charles Bon の権利要求をはねつける。*Pylon* の Jack Holmes とは違って、Thomas の身振りは、「歴史」の流れに完全に逆行している。したがって、Thomas は、「時の大鎌」にかかって命を召される、paternalism の最後の殉職者である。そして、Faulkner の文学的キャリアにおいても、これ以降 Roger Shumann や Thomas Sutpen のような paternalist の大人物は全く登場しない。むしろ、彼の興味の対象は、Flem Snopes のような徹頭徹尾 liberalist である人物に注がれることになる。有体に言えば、*Absalom, Absalom!* 以降の作品は、私にとって、興味の持てるものでないのだが、おそらく、これは、paternalism の消滅とともに、文学が大文字の「文学」では無くなってしまうことからきているのだろう。

注

- 1) liberalism の本質的構成要素である freedom 自体が歴史的に変容する概念である
 “Rather than seeing freedom as a fixed category or predetermined concept, I view it

as an 'essentially contested concept,' one that by its very nature is the subject of disagreement" (Foner xiv)。

- 2) Michael Denning は、New Deal について、"This corporate liberalism was secured [...] 'by the spread of liberal Protestantism [...]"と、伝統的な liberalism と地続きであることを認めている (44)。
- 3) その意味では、Sigmund Freud の「精神分析」ほど、核家族の「三角関係」に基礎をおいている理論はない、と言えるだろう。
- 4) Lee Alston, Joseph Ferrie の *Southern Paternalism and the American Welfare State* によると、paternalist が与える「恩給」の項目は以下の通りである：

They [benefits] included old-age assistance, unemployment insurance of a sort (carrying the tenant through a poor season), medical care, intercession with legal authorities, recreational amenities, housing, garden plots, fuel, hunting privileges, general advice, credit, donations to schools and churches, and aid in times of emergencies, among others. (13)

- 5) この議論は、先に引用した Alston らのものだが、Eugene Genovese の *Roll, Jordan, Roll* にも、"Southern paternalism, like every other paternalism, had little to do with Ole Massa's ostensible benevolence, kindness, and good cheer. It grew out of the necessity to discipline and morally justify a system of exploitation"といった記述がある (4)。
- 6) やはり、こうした「気概」を知るために我々がひも解くべき書物は、W. J. Cash の *The Mind of the South* である。Cash は Faulkner の同時代人であるが、1941年の時点ですでに、paternalism のマルクス主義的解釈に疑義を呈しているのには本当に驚かされる"[...] the landlords of the South naturally did not see themselves as any wicked oppressors out of a Marxist legend but as public benefactors [...]" (166-67)。
- 7) John Duvall が "No man by himself is the transcendental presence of male authority" と言うように、「支配」「被支配」の関係である paternalism は、単独の人間では絶対に成立しないのである (92)。
- 8) *The WPA Guide to New Orleans* には、「New Orleans の初期の新聞は、印刷に時間がかかりすぎ、ニュースは噂より速く伝えられるために、ニュースにはあまり紙面が割かれなかった」とある (90)。そのことと多少は関係があるのだろうか、そこでは、George W. Cable, Lafcadio Hearn, Walt Whitman などの文学者が活躍していた。このガイドブックは、言わずと知れた New Deal の「芸術家救済プロジェクト」によって作られたが、Faulkner がこの WPA を嫌っていたことは後の小説 *If I Forget Thee, Jerusalem* (1939) の記述からも明らかである。ちなみに、このガイドブックは New Orleans 時代の Faulkner にも触れていて、"William Faulkner, who resided in New Orleans during 1924 and 1925, for a time sharing an apartment with Sherwood Anderson, published both poems and articles in the magazine, and during his stay here wrote

most of his first novel, *Soldier's Pay*”と紹介されている (117)。

- 9) このあたりの記述は、Main Street の登場人物 Dr. Kennicott を彷彿とさせるものである。この小説は、liberalist の主人公 Carol が、(彼女の夫に代表される) Gopher Prairie の paternalism に挑戦する物語であるが、医師が深夜雪の中を農婦の診察のためにはるばる出かけるくだりでは、paternalism が liberalism に束の間の勝利を収める：

He was instantly asleep—one hour of rest before he had to be up and ready for the farmers who came in early. She marveled that in what was to her but a night-blurred moment, he should have been in a distant place, have taken charge of a strange house, have slashed a woman, saved a life. (194)

- 10) Faulkner が paternalism の限界に気づき始めた「転回点」は、*Flags in the Dust* (1929) と *The Sound and the Fury* (1929) の間にある、と Kevin Railey は指摘するが、私もこの意見に同意する (41)。だからといって、Faulkner は paternalism を完全に見捨てるのではなく、彼の基本的な立ち位置はいつも paternalism にあったのである。
- 11) Sara Gerend は、*Absalom, Absalom!* を「帝国主義」的に読む際に、Haiti に対して paternalistic な関心を向ける20世紀初頭の「アメリカ」と、Haiti 生まれの Charles Bon を「Sutpen の息子」と決定する Quentin, Shreve を重ね合わせているが、彼女の論では、両者の動機の違いが全く考慮されていない難点がある (18)。前者の paternalism が、liberalism の金銭的欲望を隠蔽するための「隠れ蓑」であるのに対し、後者の paternalism は、incest に勝る「タブー」としての miscegenation を「階級」意識的な社会に突き付けることで、Bon のような黒人を排除することを狙ったものである。
- 12) David Leverenz は、paternalism が upward mobility の抑圧装置として機能することを、以下のように記述している“Racist hierarchy blatantly prevents African Americans from achieving the kinds of upward mobility that would allow them to mix with ‘respectable’ white people” (11)。Leverenz の論は、(「北部」ビジネス社会の)「階級」「ジェンダー」における paternalism に焦点を当てるものであるが、upward mobility への反感においては、「人種」に勝る要素がないことを、この引用部分で暗に示している。
- 13) *The WPA Guide to New Orleans* には、“Racing has long been a popular sport in the city. In ante-bellum days New Orleans had five of the finest tracks in the country and witnessed many outstanding races [...]. [...] At present racing is perhaps the leading sport in the city”とある (87)。
- 14) Bruce Kawin は、Faulkner の映画キャリアを“Faulkner went to Hollywood with an idea for Mickey Mouse; he left with the idea for *A Fable*, which he considered his ‘magnum opus’ [...]”とまとめている (68)。この言葉には多少の誇張があろうが、ざっくり言えば、Faulkner は、映画についての知識をほとんど持たずにハリウッドにやってきて、そこでも自身の文学的テーマを深化させることに専心したのである。

- 15) 伝記によると、Faulknerは1934年11月初めに *Pylon* を書き始め、12月15日にはすでに書き終えていたのである (Blotner 339-41)。

Works Cited

- Alston, Lee J. and Joseph P. Ferrie. *Southern Paternalism and the American Welfare State: Economics, Politics, and Institutions in the South 1865-1965*. Cambridge (UK): Cambridge UP, 1999. Print.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography (One-Volume Edition)*. Jackson: UP of Mississippi, 1974. Print.
- Cash, W. J. *The Mind of the South*. 1941. New York: Vintage, 1991. Print.
- Chesnutt, Charles. *The Marrow of Tradition*. 1901. *Charles Chesnutt: Stories, Novels, and Essays*. Ed. Werner Sollors. New York: Lib. of America, 2002. 463-718. Print.
- Denning, Michael. *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century*. London: Verso, 1997. Print.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990. Print.
- Faulkner, William. *Faulkner at Nagano*. Ed. Robert A. Jelliffe. Tokyo: Kenkyusha, 1956. Print.
- . *Pylon*. 1935. *William Faulkner: Novels, 1930-1935*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Lib. of America, 1985. 775-992. Print.
- Federal Writers' Project. *The WPA Guide to New Orleans: The Federal Writers' Project Guide to 1930s New Orleans*. 1938. New York: Pantheon, 1983. Print.
- Foner, Eric. *The Story of American Freedom*. New York: Norton, 1998. Print.
- Genovese, Eugene D. *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made*. 1972. New York: Vintage, 1976. Print.
- Gerend, Sara. "'My Son, My Son!': Paternalism, Haiti, and Early Twentieth-Century American Imperialism in William Faulkner's *Absalom, Absalom!*." *Southern Literary Journal*. 42.1 (2009): 17-31. Print.
- Hagood, Taylor. *Faulkner's Imperialism: Space, Place, and the Materiality of Myth*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2008. Print.
- Kawin, Bruce F. *Faulkner and Film*. New York: Ungar, 1977. Print.
- Leverenz, David. *Paternalism Incorporated: Fables of American Fatherhood 1865-1940*. Ithaca: Cornell UP, 2003. Print.
- Lewis, Sinclair. *Main Street*. 1920. *Sinclair Lewis: Main Street & Babbitt*. Ed. John Hershey. New York: Lib. of America, 1992. 1-486. Print.
- Railey, Kevin. *Natural Aristocracy: History, Ideology, and the Production of William Faulkner*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999. Print.

Stecopoulos, Harilaos. *Reconstructing the World: Southern Fictions and U.S. Imperialisms, 1898-1976*. Ithaca: Cornell UP, 2008. Print.

Szalay, Michael. *New Deal Modernism: American Literature and the Invention of the Welfare State*. Durham: Duke UP, 2000. Print.

Webster, Jean. *Daddy-Long-Legs*. 1912. New York: Dover, 2002. Print.